

学生海外研修における大学教員の役割と今後の課題

山口 さおり¹⁾, 稲留 直子²⁾, 八代 利香¹⁾, 新地 洋之³⁾

要旨 韓国の中央大学校赤十字看護大学における第3回目の学生交流プログラムが企画され、学生6名が鹿児島大学学生海外支援事業の助成を受けて参加した。今年度より、スキルアップの目的で若手教員が引率を担当することとなり、助教2名が引率した。海外研修における教員の役割は、先方の大学とのプログラムの交渉に始まり、研修中の学生支援、研修後の報告会の開催まで多岐にわたっている。教員が、それらの役割を遂行することは、語学力を磨き、国際的な視座から柔軟に看護を捉えるきっかけとなり、学生海外研修は、教員にとってもグローバル化への対応能力を研鑽する機会として非常に意義のあるものだと考える。学生海外研修を発展的に継続していくためには、資金面の確保、海外研修のガイドラインや国際交流のための組織体制の構築など、看護学専攻としての組織的な取り組みが課題となる。

キーワード: 国際交流, 大学教員, グローバル化, 韓国

はじめに

高等教育におけるグローバル化への対応は、大学が取り組むべき喫緊の課題である。本学では、「グローバルな視野をもち、国際社会の発展に貢献できる実践的な能力を育む」という教育目標を掲げ、グローバル化に対応する能力の向上を目指し、学生の海外派遣を支援する事業を展開している。その一つに、鹿児島大学学生海外研修支援事業がある。この事業は、本学の大学憲章に基づき、自主自律と進取の精神を併せ持ち、かつ社会の発展に貢献し、国際社会で活躍できる人材の育成を図るため、本学で実施する学生の海外研修を支援することを目的としたものである。看護学専攻では、平成23年度よりこの事業の支援を受けて、延べ20名の学生が海外で学ぶ機会を得てきた。また、平成24年11月に韓国の中央大学校赤十字看護大学 Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University (以下 CAU) と本学医学部が部局間の学術交流協定を締結したことから、この事業と学生交流プログラムをリンクさせた形で CAU を訪問し、交流を重ねて

いる。この学生交流プログラムは、看護学専攻の「豊かな人間性と幅広い教養、科学的・批判的思考を養うことにより、人々の健康と福祉の向上に貢献し、進取の精神で看護学を発展させていくことのできる看護の専門職者を育成する。さらに、グローバルな視野を持ち、離島・へき地を含めた地域医療の発展に寄与できる人材を育成する。」という教育目標、ならびに「看護の問題をグローバルな視点でとらえ、幅広く人々の健康に貢献できる。」というディプロマポリシーに則したものとなっている。

平成27年度は、平成27年8月30日から9月6日までの8日間、CAUにおける学生交流プログラムが計画され、鹿児島大学学生海外研修支援事業の助成を受けて看護学専攻3年生6名が海外研修に参加した。過去の研修における学生の学習成果は、既に報告されているところであるが¹⁾²⁾、研修実施に当たっては、研修計画の立案から引率に至るまで、教員に求められる役割は大きい。また、今年度よりスキルアップの目的で若手教員が引率を担当することとなり、今後看護学専攻として継続した国際交

¹⁾鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 総合基礎看護学講座

²⁾鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 地域看護・看護情報学講座

³⁾鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 臨床看護学講座

連絡先: 山口さおり

〒890-8544 鹿児島県鹿児島市桜ヶ丘8-35-1

Tel/fax 099-275-6809

e-mail: saori-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

流を推進するためには、教員が担う役割を明らかにしておく必要があると考えた。

そこで本稿では、学生海外研修で求められる大学教員の役割について今年度の海外研修をもとに報告し、教員が学生海外研修に引率者として参加する意義と今後への課題について考察したい。

1. 学生海外研修の概要

1) 研修の背景

今回の訪問は、CAU 赤十字看護大学と鹿児島大学医学部の部局間の学術交流協定に基づき実施された、第3回目のCAU訪問である。平成26年1月および平成27年1月にはCAUの学生および教員が8日間の日程で本学を訪れ、学内外で日本の看護教育や保健・医療・福祉システムについて学ぶとともに、文化交流を含めた学生間の交流も行われてきた。鹿児島大学医学部とCAU赤十字看護大学の教育・研究の交流を促進するために締結された学術交流協定の内容は、以下の6点である。

- (1) 研究者および専門家の交流
- (2) 学部生および大学院生の交流
- (3) 学術資料、出版物、情報の交換
- (4) 共同研究プロジェクトの遂行
- (5) 学術集会、会議、ワークショップへの相互協力と参加
- (6) その他、両大学、学生、一般社会の相互利益となる教育プログラムの発展の精神に基づく当該協定に起因する実行可能で適切な教育的活動

なお、鹿児島大学学生海外研修支援事業の支援対象は、共通教育科目または学部の専門教育科目として実施する研修であることが定められているため、今年度は本専攻3年次の看護専門教育科目である「国際看護学」の授業の一環として実施した。したがって、今年度の研修の目的は、「CAUでの授業や実習への参加、学生や教員との対談、および保健診療員の活動見学と保健医療関係者との面談を通して、本校学生が母国語以外の言語でディスカッションする力を身につけるとともに、海外の保健と看護に関する人的資源や教育の多様性について理解すること」と設定した。

2) 研修プログラムについて

研修日程：平成27年8月30日～9月6日

研修参加者：看護学専攻3年生 6名（「国際看護学」受講者）

引率教員：看護学専攻助教 2名（「国際看護学」科目担当者）

研修場所：Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University
Chung-Ang University Hospital
Dongjak Senior Wellness Center
Dongjak Public Health Center
Dojeon Health Clinic

研修行程：表1参照

研修参加者は「国際看護学」を受講している学生であり、科目担当責任者が、講義の第1回目に「国際看護学」の授業の一環として韓国での海外研修を実施する旨を周知した。授業日程終了前に、再度研修について概要を説明し、希望者が募集人数を超えた場合は、課題による選考を実施する旨、伝達した。結果、10名の学生より参加希望の申し出があったため、希望学生にレポート課題の提出を求め、科目担当教員3名で6名の学生を選考した。選考は、レポート課題である「韓国での海外研修や学生との交流が、国際看護学の理解と自身の将来にどのように影響するか」というテーマに基づいた論述内容を評価し、語学能力や成績は選考条件としなかった。

引率は、看護学専攻の方針に基づき、「国際看護学」の科目担当教員である助教2名が選任された。引率教員の背景としては、大学教員歴10年および2年半であり、それぞれ1～2年の海外経験を有している。学生を海外

表1 2015鹿児島大学医学部-中央大学校赤十字看護大学学生交流プログラム
2015 CAU-KU Student Exchange Program (August 30-September 6)

	Time	Events
Aug. 30 (Sun)	~17:30	Arrive at the Incheon Intl Airport
	~20:00	Check in the Guest house (Blue Mir Hall)
Aug. 31 (Mon)	9:30~11:00	Welcome remarks by vice- President, Dean Introduction to Red Cross College of Nursing, CAU Introduction to Korean Health care System Program Orientation
	11:00-12:00	Facility Tour at Red Cross College of Nursing (BULD 103 & 102 7th Fl. SPRING hospital)
	12:00-13:30	Welcome Lunch at University Club
	16:00-18:00	Campus Tour with Buddy
Sep. 1 (Tue)	09:00~11:00	Observation: Fundamentals of Nursing Practice II (Lab)
	14:00~16:00	Visiting Dongjak Senior Wellness Center
Sep. 2 (Wed)	10:00	Meet at BULD 102 Lobby
	10:30-12:00	Welcome by President of CAU Hospital Tour
	12:00-13:00	Lunch with Hospital buddy
	13:00-15:00	Students and Professors: Practice with Nursing Students
	15:00-16:00	Debriefing at SPRING Center
Sep. 3 (Thu)	9:00-11:00	Join to Class, Emergency & Disaster Nursing
	14:00-16:00	Visit Dongjak Public Health Center
Sep. 4 (Fri)	08:00-10:30	Move to Yeosu, Gyeonggi-Do
	10:30-12:00	introduction to Dojeon Health Clinic and Practice
	12:00-13:30	Lunch
	13:00-15:00	Home Visiting with PHN
	18:00-17:00	Farewell Dinner
Sep. 5 (Sat)	Full Day	Seoul City Tour with Buddy
Sep. 6 (Sun)	9:00	Check-out
	10:00-11:00	Move to ICN

へ引率することは、初めておよび2回目の経験であった。また、両名とも看護学専攻の学术交流協定締結校学生交流ワーキンググループ（以下学生交流WG）のメンバーとして、過去2回CAUの学生・教員が本学を訪問した際に、施設見学の案内や滞在中のサポートを行っている。

2. 研修の事前準備における役割

1) 研修実施の判断

平成27年5月末から6月にかけて、韓国で中東呼吸器症候群（MERS）の感染拡大が認められたため、国際交流プログラム実施の最終的な判断がすぐに下せない状況であった。外務省からの渡航情報や感染症情報を収集し、また現地の教員と情報交換を行いながら、感染の危険性が高い場合は、学生の安全を第一に考え研修を中止・延期することも視野に入れて対応した。8月に入り、韓国政府による事実上のMERS終息宣言が発表されたのを受け、科目担当責任者が医学部長に研修実施について確認を取り、オフィシャルレターが発行され、研修の実施が決定した。また、研修実施直前には、韓国と北朝鮮の軍事的緊張状態も懸念されたが、8月24日に両国の協議により緊張状態は解消され、研修は予定通り実施されることとなった。

2) CAUとの交渉

CAUとの交渉は、本専攻の学生交流WGの委員長が担当した。委員長は「国際看護学」の科目担当責任者でもあり、先方との交渉を進めながら、「国際看護学」受講学生への情報提供を行うことが可能であった。加えて、学生交流WGの委員長として、平成24年の学术交流協定締結に関与し、また、過去3回学生をCAUに引率した経験があり、先方の教員とも交流が深い。

学生交流プログラムについての交渉は、平成27年5月から開始され、プログラムの日程について、CAUの国際業務担当の長である教授とメールで交渉を行った。日程は、例年本学学生が夏季休暇中である8月下旬から9月上旬としているため、CAUでのacademic yearの確認が必要である。今年度は、9月1日からCAUの新学期が開始されたため、前述の研修日程はスムーズに決定した。また、学术交流協定を結んでいることから、現地での宿泊先としてCAU構内の学生寮の上層階にあるゲストハウスの利用が可能であり、その手配も同時に依頼した。CAU側からは、今回のプログラム内容の詳細について参加者の意向を尋ねられたが、MERSの感染拡大により国際交流プログラム実施の最終的な決断が下せない状況であったため、その後の具体的な交渉は学生の選考以降に実施することとした。

6月下旬に学生の選考を行い、研修参加が決定した学

生とのミーティングを経て、学生交流プログラムに対する学生の意向・要望を把握した。その要望を踏まえたCAUとの交渉は、引率教員が担当した。従来この業務は、学生交流WG委員長が窓口となって行っていたが、現地担当者であるCAUの教授と渡航前からコミュニケーションを図り、学生の意向を直接お伝えしながら、一緒に研修の計画を進めていきたいという引率教員の希望に基づくものである。7月上旬、鹿児島空港 - 仁川空港間の往復のフライト情報と参加学生のネームリスト、学生が参加を希望する講義と演習、また視察したい施設や看護の領域について、引率教員より先方へ情報提供を行った。

8月に入り、研修実施が決定したことを受け、具体的な研修計画が先方より届いた。研修に参加する学生と引率教員が内容を確認し、改めて要望や確認をとりながら、最終的に第3版まで修正して頂き、表1に示すプログラムが確定した。

3) 学生海外研修支援事業への応募

今年度の学生海外研修支援事業は、本研修を学生に周知した後に公募された。研修への参加を希望する学生には、支援事業に採択されないこともあることを説明し了解を得た。申請書提出からおよそ1カ月で、支援事業への採択の通知を受けた。支援事業では、研修に参加する学生の渡航費の一部と、海外旅行保険の加入が助成されるため、学生にとって大きな財政的サポートである。採択後助成を受けるためには、研修に参加した学生ならびに引率教員による研修後の報告書の提出が義務付けられている。

4) 旅行の手配

滞在中の計画は、宿泊先を含めてすべて先方大学によりアレンジされるため、本研修では航空券の手配のみが必要であった。今回はMERSの影響で、最終的な渡航の判断が8月に入ってからとなることが予想されたため、旅行会社に一括して航空券予約・発券を依頼した。便宜上、引率教員が窓口となって旅行会社との連絡を担い、旅行代金の支払いは学生各自で行った。

5) 学生オリエンテーションの実施

研修に関する学生オリエンテーションは、計3回実施した。3回の実施時期と内容は以下の通りである。

第1回目：平成27年7月3日

- 自己紹介
- 2015学术交流協定締結校学生交流プログラムの概要説明
- 学生海外研修支援事業申請についての説明

- 準備状況の報告・確認（航空券の手配、パスポートの取得状況・有効期限の確認）
- 学生リーダー・サブリーダーの選出
- 研修内容の詳細について（参加したい講義・演習、視察したい施設等）
- 事前学習のすすめ方および内容
 - ・韓国ならびに日本における看護教育体制および保健医療体制
 - ・韓国の文化・習慣、語学（英語・韓国語）
 - ・中央大学校赤十字看護大学について
- 研修先での学生交流企画

第2回目：平成27年8月10日

- 「国際看護学」海外研修概要
- 渡航前の準備・手続き
 - ・渡航安全確認、海外安全について
 - ・海外渡航手続きの確認
 - ・健康チェックと準備
 - ・自己の危機管理
 - ・持参するもの
- 出発～海外滞在中の留意点・心構え
 - ・集合時間・場所、フライト情報
 - ・滞在中のスケジュール
 - ・研修中の心構え
 - ・トラブルへの対応
- 帰国後～研修のまとめ
 - ・学生海外研修報告書の提出と報告会の開催
 - ・帰国後の体調管理
- 緊急時の連絡体制

第3回目：平成27年8月27日

- 最終的な準備状況及び健康状態の確認

すべてのオリエンテーションは、学生交流WG委員長の助言を受けながら、引率教員が中心となって実施した。学生を海外へ引率することは、引率教員にとってほぼ初めての経験であり、また、参加する学生の中には海外渡航が初めてである学生もいたため、オリエンテーションの内容は十分に検討する必要がある。本学における海外渡航や海外研修の手引きがなかったため、全国の国公私立の大学が作成している学生・教員の海外渡航に関するマニュアルや書籍³⁾を入手し、11頁におよぶ「学生海外研修のしおり」を作成して第2回目のオリエンテーションで学生に配布・説明した(図1)。

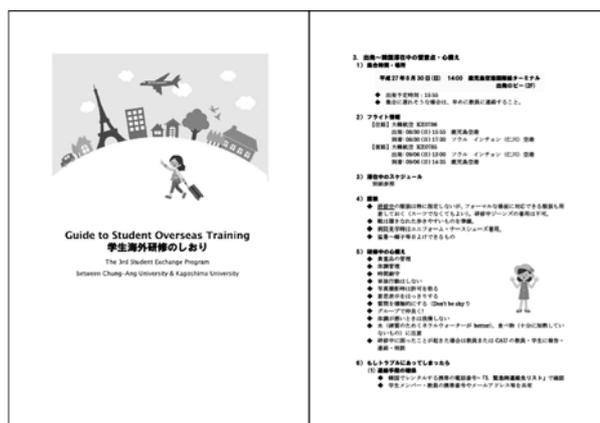


図1 学生海外研修のしおり
(表紙および本文中から1部抜粋)

6) 学生の事前学習の支援

事前学習のすすめ方および内容についてはオリエンテーションで説明し、以後学生が自主的に学習会を開催し、学びを深めた。また、引率教員は必要時文献等を提供し、学習をサポートした。今回学生は、CAUの授業の中で鹿児島や鹿児島大学について英語でプレゼンテーションする機会を頂いたため、その発表内容に関しても適宜助言を行った。

7) 韓国滞在中の危機管理

韓国滞在中にトラブルが起きた場合の対応については、前述の「学生海外研修のしおり」を用いて、警察や救急・消防、在大韓民国日本国大使館など、一般的な海外旅行時の緊急連絡先と、トラブル発生時の「教員またはCAUの教員・学生へ報告・連絡」「CAUの教員に相談して対処」という原則的な対処方法を共有した。また、学生交流WGメンバーの教員1名が国内でのサポートを担当し、引率教員との間に携帯電話およびメールによるホットラインを確立した。また、国内のサポート教員、引率者、CAU、旅行会社、保険会社の情報は、学生の家族にも提供し、緊急時の連絡体制を敷いた。なお、韓国国内でのスムーズな通信環境を確保するため、引率教員が韓国国内専用の携帯電話およびWi-Fiルーターをレンタルして携帯した。

3. 研修中における役割

1) スケジュール管理

研修中のCAU側の窓口は、国際業務担当の長である教授であったが、空港への出迎えや各研修施設等での担当者として先方の教員も割り当てられていたため、基本的に指定された時刻に指示された場所に集合することで、予定通りに研修を進めることが可能であった。また、

CAU 側の事務スタッフ 1 名が、研修期間中の実務的な対応を担って下さり、困ったことがあればオフィスに伺うことで解決できた。先方の教員やスタッフとのやり取りは、英語で行われた。

教員は、1 日の研修終了時に翌日の研修内容や集合場所、持参するものについて先方スタッフに確認し、学生へ伝達した。ゲストハウスから看護大学の建物まで、徒歩 5 分以上の道のりであったが、学生と翌朝の集合時刻について確認し、予定通りに研修が遂行されるよう努めた。

2) 代表者としての対外的な対応

研修初日には学部長や副学長の出席のもと、オフィシャルな挨拶の場も設けられた。(写真 1) また、視察先でも、引率教員に訪問者の代表として挨拶を求められることも多かった。CAU での挨拶を想定し、事前に簡単な韓国語と英語での挨拶を準備していたため、それ以外の場でも、それをアレンジして対応した。本研修は、学生交流であり、引率教員は裏方的な役割を担うことが多いが、大学間の交流、また、視察先においては海外からの訪問者という立場もあり、代表者として対外的な対応を行うことも重要な役割であることを認識する場面も多かった。

3) 学生の研修サポート

CAU ならびにその他の研修先において、講義や説明に用いられる言語は韓国語または英語であった。CAU 側の配慮により、韓国語の通訳者として、日本語を話せる研修先の職員や CAU の学生を配置して下さり、学生が研修しやすい環境を整えて頂いた。しかし、英語で実施される講義や説明は十分に理解できない学生もあり、また、日本と異なる保健・医療・福祉のシステムについては理解に戸惑う場面も見受けられたため、必要時引率



写真 1 CAU でのウェルカムセレモニー
Dean, Vice President とともに



写真 2 学生によるプレゼンテーション

教員が通訳したり、補足説明を加えたりした。本学学生が実施した英語でのプレゼンテーション(写真 2)については、前夜に教員が同席してデモンストレーションを行い、内容や発表の仕方を確認・助言した。また、1 日のプログラムを終えた後、教員同士で学生の学習状況をアセスメントし、翌日の研修が効果的に進むような課題を提示するなど、研修最終日まで、学生の学習意欲を持続させるような工夫を行った。

4) 滞在中の生活および健康管理

学生がすべての研修プログラムを意欲的に取り組めるよう、学生の健康管理も教員の重要な役割である。今回は直前の MERS の影響もあったため、事前のオリエンテーションから体調管理の重要性を強調し、体温計やマスクを持参させる等、学生が自らの健康管理を行えるよう助言した。学生は二人部屋のゲストハウスに滞在し、食事は CAU 側との会食以外は自らで選択する機会が多かったが、体調を崩す学生もみられなかった。研修の中日には、若干学生の疲労を認めたため、早めにゲストハウスに戻り休息を取らせる対処をとった。翌日の研修に支障を来さないことと帰宅時の報告を前提として自由時間を設けることもあったが、特にトラブルもなく、韓国での学生生活を満喫していたようであった。

4. 研修後の役割

研修後は、学生海外研修支援事業の支援を受けた研修として、その成果を報告書として提出する必要があったため、学生・教員それぞれが報告書を整理した。学生の報告書は、報告書としての形式を整え、学生が学習した成果を十分に表現できるように引率教員で助言・指導した。

また、平成 27 年 10 月 2 日には学生海外研修報告会を医学部主催で実施した。この報告会は、学年・専攻を超えて学生の経験を伝えることで、今回研修に参加することができなかった学生との学びの共有を目的とし、加えて今はまだ興味・関心を持っていない学生の視野を広げる

機会となることを期待して計画した。この報告会の日程調整やリーフレットの作成、教員・学生への周知等の企画・運営は、学生交流WG委員長と引率教員が中心となって実施した。医学部長と専攻代表の挨拶を頂き、例年よりフォーマルな形式での開催となったが、発表学生は自信を持って自らの経験を発表していた(図2、写真3)。また、学生からは、自分たちに続いて多くの学生に海外研修に参加してほしい、次回CAUの学生が本学を訪問する際には積極的に交流に参加しようというメッセージも発信され、国際交流の継続が期待される報告会となった。



図2 海外研修報告会のリーフレット



写真3 海外研修報告会における報告の様子

5. 教員にとっての学生海外研修の意義

学生海外研修における大学教員の役割について、研修準備から研修実施、そして研修後のプロセスに沿って今年度の海外研修をもとに報告してきた。海外において、安全かつ効果的な学習環境を提供するための準備・交渉から学生への直接的な指導に至るまで、教員の果たすべき役割は多岐にわたっているが、その役割を遂行することは、ひいては教員がグローバル化への対応能力を研鑽することにつながるとも言えるだろう。ここでは、今回引率した教員の学びを振り返りながら、大学教員にとっての学生海外研修の意義について考えてみたい。

グローバル化対応能力と言え、まず海外の人とコミュニケーションをとるための語学力が求められることは言うまでもないが、語学力を必須条件と考えるあまり、国際交流へ積極的に関わることを躊躇してしまうという現実もあるだろう。実際、国際交流活動の企画・運営に当たっては「人的資源の限界」「言葉の問題」が大きな課題となるという報告もある⁴⁾。今回海外研修を引率した教員の語学力は、例えば英語で講義を出来るほど流暢ではなかったが、チャレンジする姿勢で研修に臨んだ。時には、相手からの伝達内容を聞き間違えることもあったが、その姿も学生に見せながら、英語や時には韓国語でのコミュニケーションにチャレンジした。その上で強調したいのは、語学力を備えてから国際交流に参加するのではなく、まず海外に出てみるのが重要で、学生海外研修が教員にとってもよい機会となり得るということである。もちろん、引率者としては前述したように対外的な場面での挨拶等も求められるので、語学に関する自己研鑽は必要であるが、それを実践的に使える場として学生海外研修は最適な機会だと考える。加えて、CAUでは、専門用語を英語で教授したり、英語のみで実施される授業があったりと、学生のグローバルな活躍を視野に入れた教育を行っている。今回参加した“Emergency & Disaster Nursing”の授業でも、担当教授が日本の学生に配慮し、当初の韓国語での実施予定であった講義を全て英語で実施して下さったが、CAUの学生の反応を見ていると大半の学生が理解できているようであったし、資料も含めてすべて英語での講義に切り替えて下さった教員の英語力の高さにも感嘆した。また、今回の研修中、「上手くはないのですが…」と言いながらも、英語や日本語で説明をしてくださったCAUの学生やスタッフの姿を目の当たりにし、母国語以外の言葉でのコミュニケーションに果敢にチャレンジする姿勢に、畏敬の念を抱かざるを得なかった。このような経験を通して、引率教員が共有した思いは、同じ看護という学問を学び教授するものとして、自分の考えを伝える一つのツールとして語学力を高めたいということである。海外

と言っても、CAUのある韓国は距離的に近く、同じ東アジアの国として文化的に共通する部分もある。また英語が母国語ではないという点では、肩肘を張らずに自分の語学力を試し、また語学力を磨くための刺激を受ける機会として、教員が学生海外研修を引率する意義は大きいのではないかと考える。

また、教員は、一看護者・一教育者として、学生海外研修を通じて韓国における看護教育や保健・医療・福祉のあり方について学ぶ機会を得ることができる。CAUには、1フロアを占めるSimulation Practice in Nursing (SPRING) センターがあり、その見学や演習への参加を通して、多領域にわたる充実したシミュレーション教育や技術教育の評価の実際について学ぶことができた(写真4)。また、今回視察した、保健診療員の活動は大変興味深いものであった。保健・医療へのアクセシビリティが悪い農漁村地域に設置されている保健診療所で活動する保健診療員は、看護職でありながら100種類以上の薬剤の処方権を持ち、住民に最も近いプライマリヘルスケアの提供者である。保健診療員が、住民の健康を守るために看護師としての専門性を発揮しながら、いきいきと活動する様子を拝見し、自律して働く看護職としての面白さ・醍醐味を再発見するとともに、それぞれの教員の背景の中で看護者の自律について考える良い機会となった(写真5)。山本は、「海外の看護を知ることで、日本の看護の中の常識を絶対的なものではなく、相対化して見るができるようになる。海外を経験することによって逆に、より深く日本を知ることになる。」⁵⁾と述べている。今回引率教員は、それぞれ海外で看護を学ぶ、



写真5 Dojeon 保健診療所の前にて

あるいは実践した経験を持っていたため、その意味を体験から理解はしていたが、研修中学生が、「なぜ日本と同じようにしないのか？」と日本で学んだことがすべて正解＝絶対的なものと考え様子を見て、看護者が海外へ出ていくことによって、日本の看護を相対的に捉えられるようになり、創造性をもって柔軟に看護を考えることができるようになるきっかけになるのではないかと感じた。1週間の研修では、もちろん看護者としての既成概念を少し揺さぶられるぐらいかもしれないが、それでも実際に海外に出て、見聞きし、体験した経験は何物にも代えがたい。それは、教員にとっても同じである。グローバル化に対応できる学生を育むには、まず教員が看護におけるグローバル化の意義を経験的に理解し、国際的に視野を広げる必要性を実感することから始まるのではないだろうか。その第一歩の機会として、学生海外研修が看護者としての教員にもたらすものは少なくないだろう。

6. 今後への課題

本専攻における学生海外研修は、CAUとの学术交流協定締結以降3回の相互交流を数えたが、学生のみならず教員にとってもグローバル化への対応能力を研鑽する機会として非常に意義のあるものである。今後発展的に継続していくためには、いくつかの課題も明らかとなったので整理しておきたい。

まずは、引率者として参加する教員の旅費等の資金面の確保である。国際交流における財政面での基盤の確保は、他大学でも課題となっているが⁴⁾⁶⁾、研修に参加する学生の経費も含めて確保できるよう外部資金の獲得も視野に入れた取り組みが必要である。加えて、学生が鹿児島大学学生海外研修支援事業を通じて財政的な補助を受けるには、正規の授業科目であることが求められる。学生間の認知度も上がり、この研修に参加することを目



写真4 SPRINGセンター見学の様子

的に科目選択する学生もいたようであるが、今年度までは、専攻で海外研修を実施する専門科目を流動的に設定してきた。今後学生が、海外研修に参加するという目標を明確にもって授業を受講できるように、学生の選考基準や引率教員の選定基準も含めた明確なガイドラインや国際交流のための組織体制の構築が急務であり、看護学専攻としての組織的な取り組みが重要であると考え。また、現在は、海外研修を実施する科目の単位取得には海外研修への参加は必須条件となっていないが、将来的には海外研修そのものを正規の科目として組み込んだり、あるいはCAUとの単位互換など、学生が海外で学ぶメリットを充実させたりしていくことも必要であろう。

次に、学術交流協定の活性化である。前述したとおり、本学とCAUの学術交流協定では、研究者間の交流も重要な位置づけとなっている。今回、研修に参加した引率教員とCAUの教員間では、研究についてまで話を広げることができなかったが、過去2回の本学での交流プログラムに同行した教員と再会し、実験研究室を見学させて頂いたり、授業方法についてコミュニケーションを取りながら、CAUのオリジナルのテキストを頂いたり、次につながる関係性ができつつあることを実感した。このような教員間の草の根レベルの交流から、将来的には共同研究や学術シンポジウムの共同開催などに展開できれば、まさに本専攻の「看護の問題をグローバルな視点でとらえ、幅広く人々の健康に貢献できる。」というディプロマポリシーに基づいた学生の教育を具現化できるのではないだろうか。

おわりに

本稿では、本専攻における学生海外研修における教員の役割を整理し、引率教員にとっての海外研修の意義や今後の課題について考察した。今後も、若手教員が自らの研鑽の機会として、また大学教員として国際交流に関わるきっかけとして、海外研修の引率を継続していけるよう、本稿がその一助となれば幸いである。

引用文献

- 1) 八代利香, 松成裕子, 李笑雨: 鹿児島大学学生海外研修事業の報告 - 韓国の Chung-Ang University および保健診療所の訪問活動 - . 鹿児島大学医学部保健学科紀要2012; 22(1): 1-6
- 2) 中尾優子, 八代利香, 津留美美里, 他: 鹿児島大学学生海外研修事業の報告 (助産学コース大学院生) - 韓国での産後ケアセンター, 母乳育児支援センター訪問とプレゼンテーション体験 - . 鹿児島大学医学部保健学科紀要2015; 25(1): 19-24
- 3) 竹田洋志: 海外安全ハンドブック改訂版, 今井出版, 鳥取, 2015
- 4) カルデナス暁東, 西頭知子, 月野木ルミ, 他: 日本私立看護系大学の看護学教育における国際交流活動に関する実態調査. 大阪医科大学看護研究雑誌 2013; 3: 147-156
- 5) 山本則子: 国際交流が看護系大学院にもたらす意義. 看護研究 2010; 43(1): 19-23
- 6) 田村真由美, 白石裕子, 藤井加那子: プリンス・オブ・ソククラ大学看護学部との国際学生間交流における連携システムの構築と課題. 南九州看護研究誌 2015; 13(1): 33-40

Roles of faculty members and future directions in student overseas training

Saori Yamaguchi¹⁾, Naoko Inadome²⁾, Rika Yatsushiro¹⁾, Hiroyuki Shinchi³⁾

- 1) Department of Fundamental Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University, 8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan
- 2) Department of Community Health Nursing and Nursing Informatics, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University
- 3) Department of Clinical Nursing, School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence to: Saori Yamaguchi,
8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima City 890-8544, Japan
Tel&Fax: 099-275-6809
e-mail: saori-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

Six students participated in the 3rd Student Exchange Program at Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University (CAU), Korea, with a grant from the Kagoshima University Student Overseas Training Support Project. To improve leadership and training skills, two research associates of the division of nursing accompanied the students' group to Korea. The roles of faculty members in the overseas training program are diverse, such as consulting with CAU about the exchange program, supporting students during the program, and conducting briefing sessions after the student exchange program. By taking on these roles, faculty members have the opportunity to improve their language skills and have a flexible understanding of nursing from an international perspective. Thus, student overseas training program is truly significant not only for students but also for faculty members as a way of improving the ability to respond to globalization. Future directions for the constructive continuation of student overseas training are as follows: securing funding, establishing a guideline for student overseas training, and creating an organizational structure for management of international exchange based on the organizational effort of the division of nursing at Kagoshima University.

Key words: international exchange, faculty members, globalization, Republic of Korea